

## 第9回青森県地方分権推進シンポジウム

トークセッション ～地域の底力を示そう～

月日：平成24年1月12日（木）

場所：青森国際ホテル 3階「萬葉の間」

進行：松本 克夫氏（フリージャーナリスト 地方財政審議会委員）

参加者：湯浅 優子氏（スローフード・フレンズ北海道リーダー）

久保 和子氏（階上町 副町長）

田中 卓氏（NPO 法人やませデザイン会議 議長）

武内 伸文氏（社会活動団体「SiNG」代表）

### ●司会者

トークセッションを始めます。

ご出演の皆様をご紹介させていただきます。

コーディネーターをお務めいただきますのは、フリージャーナリストで地方財政審議会委員をお務めでいらっしゃいます、松本克夫様でございます。

続きまして、パネリストの皆様をご紹介させていただきます。

皆様より向かって左手より、スローフード・フレンズ北海道リーダー、湯浅優子様でございます。

湯浅様は、北海道新得町からお越しいただきました。ありがとうございます。

お隣は、階上町副町長の久保和子様でございます。

NPO 法人やませデザイン会議議長の田中卓様でございます。

田中様は、岩手県久慈市からお越しいただきました。ありがとうございます。

そしてお隣は、社会活動団体「SiNG」代表の武内伸文様でございます。

武内様は、秋田県秋田市からお越しいただきました。ありがとうございます。

なお、ご出演の皆様のプロフィールにつきまして、皆様、お手元のプログラムをどうぞご覧ください。

では、これより進行は、コーディネーターの松本様、よろしく願いいたします。

### ●松本氏

トークセッションは基調講演を受けてやるということになっておりますが、神野先生が大分スケールの大きい話をされたもので、なかなか受けるのは大変だなという気がしています。歴史的な転換期というお話もありましたし、大震災からの復興というお話もありました。被災地には、いろいろな地域があるから、復興も分権的にやらなければいけない。あるいは、歴史的な転換期というところをいうと、現金給付ではなくてサービス給付中心でやっていかなければいけないから、これからの時代は自治体が担わないといけない、と

というようなお話もありました。

特に聞いていて印象に残ったのは、何のために分権をするのかという時に、生命とか共生とか参加とか、そういうことが大事だと。それこそが分権型社会なんだということをおっしゃっていましたので、そのへんのところを受けて、このトークセッションを進められればと思っております。

タイトルは「地域の底力を示そう」ですけれど、大震災の後の復興でも、地域の底力は必要ですし、地域の底力を活かしていくことこそ分権だという意味でも、ふさわしいテーマかなと思っております。

4人の参加者、それぞれ地域も違いますし、やっておられることも違います。経歴を見ただけで見当はつきませんが、この肩書きを見ただけでは、何をやっているのかよく分からないという方もおられます。まず、どういう活動をされているのかを自己紹介を含めまして一人5分程度でお願いできればということで、座っている順番でお願いいたします。

こちらから、湯浅さんからお願いします。

#### ●湯浅氏

北海道の十勝からやって来ました湯浅優子です。よろしく申し上げます。

私も今日のタイトルと自分のやっていることがどう繋がっていくかという、それほど自信はないんですが、ただ先ほどの先生のお話、神野先生のお話を聞いていて、自分が農業という立場、農村の中で生きているというところから、命に関わること、そしてその状況が危機的状況になっているなというのを感じたままが今の活動になっているので、そのへんのところをお話できたらいいのかなと思ひまして、自己紹介から始めさせていただきます。

私は、プロフィールに書いてあるとおり、1974年ですから、もう37年になったのかな。東京で育った私ですけども、本当に不思議な縁で十勝の新得町という農業をやっている地域に農業実習生で入りました。そこに行ったのも偶然ですけど、主人との出会いも偶然。でも、出会ったものに、私は結構素直に受け入れるタイプなので迷わず結婚して農業の道を選びました。

丁度、結婚した37年前から、今日に至る間、物凄い勢いで農村の中が変わっていくということ。ただ走り続けていた頃に気付かなかったものが、立ち止まり周りをふと見回すと変わっていつているなというのを感じていました。ただ、その変わっているのが、どんなふうに変わっているかが、はじめは具体的な言葉として浮かんできませんでした。小さな田舎の小さな農業地帯の中に子育てしながらすっばり入っていましたので、全然分からなかったんですね。

ところが自分の経営を考えたり、十勝の農村の風景や周りを見回したり、地域の仲間と語り合っていくうちに、今まで農業の中で目指していた大規模農業を目指すことや、生産

コストを下げるとか、更に大きな量を求められている農業自体にふとある時に疑問を持ち出したという単純な、そんな理由からでした。でも不思議ですね、そういう自分の中で生きていく上に疑問を持ったり、ちょっと違和感を持った時には、違う情報が耳の中にスッと入ってきたり、社会が見えたりするんですね。その時代は大きく、ウルグアイ・ラウンドの問題やら農村の中の様々な変化が言葉として、ニュースなどに流れるようになり、それが身近な我が家にも同じことが起きているという現実を知りました。

それで思ったんです。本当に画一的にこのまま農業や農村が大きくなっていくだけが農業のスタイルなんだろうかって。その時に初めて、もう 22 年ぐらい前になるんですが、グリーン・ツーリズムという言葉に出会いました。それは、農村の中の生産性を上げるだけではない、農村の魅力だったり、農村の価値だったり、命を支える食べ物を作る仕事にもう一度目を向けようというような動きだったり、農村の環境をもう一度見回してみようという、それは小さな投げかけから始まったようなシンポジウムだったんですけど、今日のようなこういう大きな会場で、その中にいろんな立場の方達がいらっしゃると思うんですが、そのとき、農業者は少なく、友人と 2 人でそこに出ました。

初めて、今までと違った情報を聞いたんですね。農村には、もっと違う価値があるだろうという言葉聞いた時に、共感してグリーン・ツーリズムを勉強し始めました。そこから歯車が回るようにことが進み、私は 15 年前からグリーン・ツーリズムの拠点となるファームインというのを取り入れて始めたんですね。初めて、今でいう都市と農村の交流、その時には、そんな格好いい言葉はなかったですが。ある意味、違う形の農業経営というスタイルを始めました。その時、初めて自分のいる農村の場に人と人が繋がった時に、いろんなものが見えてきました。それは、都市と農村は同じ問題が起きているなって。コミュニティが段々希薄になっていることだとか、食べ物がおざなりになっていくこととか。その食べ物を通して自分達の暮らし方や生き方があまりにも周りから見えなくなっていることなど。そういうことがスローフード運動というのに関わるきっかけでした。

人間というのは不思議ですね。今までと違ったものに関わったり人と出会ったりすることで、いろんな社会との関わりが増えてきて、それからの私は、今は 10 年間スローフード運動に関わっているんですが、ますます自分の地域・足元がとっても大事になりました。周りの世界が見え始めたと同時に自分の地域がはっきり見えてきたんですね。そこから、自治の勉強じゃないんですが、自分の地域を勉強するという姿勢に変わりました。それがきっと、今日この場に自分がいるきっかけになったのかなというふうに思うんですが、この 37 年の流れが、ちょっと急いで喋りましたけども、グリーン・ツーリズムに取り組み、そしてスローフードに関わり、地域の方達と関わるきっかけになったことかなというふうに思っています。

以上です。

●松本氏

ありがとうございました。

時間が少なくて申し訳ありません。

続いて久保さんをお願いします。久保さんは、学校の先生から副町長になりましたが、学校の先生からって割と珍しいですね。そのへんのところ、ご紹介ください。

●久保氏

青森県階上町から参りました久保和子と申します。

七戸町生まれの三沢市育ちでございます。初めて勤務した学校が階上町ということで、その時から町民となりまして、間もなく44年になります。そういうことがあって、地元の人間ということなのではないでしょうか、今の仕事というのは。

退職するまで、ずっと小学校教育に携わっておりましたけども、平成22年の1月から新しい職務に、本当に一から勉強しながら取り組んでおります。職員に教わること、町長に指導していただくこと、そういうことが沢山あって、本当に勉強の毎日なので、教職の時より勉強しているかなという、そんな感じです。

今回、東日本大震災の被災地の女性で行政関係者ということでご依頼がありまして、このように経験の浅い身で大きなテーマである「地方分権」ということに、多分、対応できないなととても不安でしたけども、勉強の機会だと思って参加させていただきました。どうぞよろしく願いいたします。

私の仕事は、町の仕事ですので、ここで階上町について少しご紹介いたします。

当町は、青森県の最東南端に位置しまして、県内で最も早く朝日が昇るところから、「ひかり生ず、階上町」と謳っております。八戸市のベッドタウンして発展して参りまして、町政を施行しまして32年になり、人口は15,688人、今日、ちょっと変わったかな？そのぐらいでございます。

町のシンボルとしましては、標高740mの階上岳と変化に富んだ海岸線がございまして、つつじの花を愛でながらのトレッキングとか、釣りファンが多数訪れる自然豊かな県立自然公園となっております。

特産品としましては、ウニとアワビの贅沢なお吸い物、「いちご煮」と言います。それから、生ウニ丼も大変美味しいです。夏場が旬ですので、どうぞお越しいただければと思います。

それから、青森県で唯一奨励品種に採用されております、「階上早生階上そば」それから、豊富な海産物などもございます。

今年度の事業の方に移りますが、何と言いましても被災者支援と被災施設などの復旧、これを最優先してやっております。

また、大きな事業としましては、閉校校舎を活用した「わっせ交流センター」という地域の交流センターですが、その整備で地域の活性化と先ほど申しました階上早生そばの振

興拠点として現在、工事を進めており、今年4月にオープン予定です。

早くも全国廃校サミットの開催のお話もございまして、その施設の有効活用について今、着々と準備が進められているところでございます。

そのほか、協働のまちづくりにも力を入れておりまして、19全行政区が作りました地区計画に基づいたまちづくりを進めております。全く行政経験のない私ですが、どこかに教職経験、あるいは女性の視点を活かした仕事ができないものかな？ということで、明るい職場づくり、そして職員の資質向上に関わっていければいいなど、そのように心がけて現在、過ごしております。

以上でございます。

●松本氏

ありがとうございました。

では続きまして、田中さんをお願いしますが、田中さんも何か随分いろいろな活動をされているようで、5分で喋れというのは難しいかと思いますが、できるだけ5分でお願いします。

●田中氏

岩手県久慈市より参りました田中と申します。

岩手県でも県北の沿岸地域、殆ど階上町さんとお隣同士みたいな関係です。今日も朝、階上町を通過して八戸から新幹線に乗って青森に來させていただきます。

「やませデザイン会議」というNPO団体の今、代表をさせていただいておりますが、プロフィールにもあるとおり、今年で20年目の団体なんです、私が6番目の代表になります。ですから、代表を務めた先輩が5人いらっしゃって、私がその6番目で、今、活動させていただいているという状況です。

いわゆるNPOの中でも中間支援という働き方をしております、NPOを応援するNPOであったり、地域づくりとかボランティア団体さんを応援するというふうなことを仕事の中心にしております。

一方で、指定管理を受けまして、今、私共には3名の事務職がおりますけども、事務職は有給で働いておりますが、あとのメンバーは全員ボランティアという形でございます。私もほかに本業を持っております。

特に県北、岩手県の県北沿岸というと、岩手県、あまり裕福な県ではないんですが、その中でも飛びぬけて貧乏な地域というふうに言われております。なかなか主だった産業もありませんし、観光地は、自然景観は物凄くいいんですけども、皆さん、通り過ぎてずっと八戸で新幹線を降りて、ずっと南下しながら海岸を見て、宮古から花巻とか、あっちの方に行ってお泊まりになるというふうなパターンで、ここ数年の観光は通り過ぎております。

そういう地域にあって、何にもないので、楽しみようもないと。そういう中で都会の方から戻って参りまして、自分達が楽しむためには、自分達で楽しみを見つけなければならぬ。ただ、1回、2回楽しんでも、そのまま終わらせてしまうと自己満足でしかない状態になりますので、いかに楽しみ方を見つけて、それを楽しむ仲間を集めて、それを継続させるというのが凄く大事な取り組みになってきております。

いろんな活動の中で、特にここ何年かでやらせていただいたのは、久慈市に滝ダムというダムがございます。本当に市街地から車で10分ぐらいの所にあるダムなんですけど、そこに屋形船を浮かべて、観光船を就航するというふうなことをやらせていただきました。当然、県の所有物のダムですし、それに民間の船を乗り入れるというのは、非常に大変な作業だったわけなんですけど、社会化実験というふうな名目でそういうことをやらせていただいて、一応の評価をいただきました。

今現在は、市と民間団体が協議会を作って、その運行の管理などをやらせていただいております。

ですから、私達は、いろんな形で提案をしながらいろんなことに頭から突っ込んでいくんですが、いつまでもそれを自分達で抱えているわけにはいかないような状態の団体です。ですから、いかにそれを一緒にやってくれる人達を集めて、作業を継続していただけるかというのを一生懸命中心に頑張っております。

震災以降、いろんな取り組みがあって、階上町さんもそうなんですけど、久慈市も比較的人的被害の少ない状況でした。ですので、かなり被害金額は大きかったんですが、宮古とか釜石とか大槌とか、宮城県の方、石巻なんかと比べると非常に取り扱われる頻度が少なく、未だに「津波、来たの？」って聞かれる人もいらっしゃいます。

そういった中で、自分達がとりあえず参加できる活動、勿論、自分達の仕事も継続してありますので、なかなかボランティアを中心にとすることは難しい状況ではあったわけなんですけど、その中で、自分達がやれることをまず始めましょうということで、特に、三陸鉄道さんとは今までずっといろんな活動を通じてご一緒させていただいておりますので、今現在、隣の久慈市の隣の野田村までしか三鉄さんは動いていないんですが、そういった三鉄さんの支援を中心として、自分達ができることを1つずつ考えながらやっていこうというふうな形でやっております。

特に、今、縁市という形で、絆というか縁ですね。それで朝市を月1回やって、その売上金を三鉄さんに寄附したり、三鉄さんは線路が分断されてしまったので、野田村の隣の普代駅という所に一両だけポツンと車両が取り残されています。車両自体は被害が無いんですが、宮古にも行けませんし、久慈にも戻れません。線路が途中で途切れてしまっているから。そこに今、車両が一両だけ残っているから、これじゃちょっと可哀想だということで、全国の皆さんから働きかけを頂戴して、ダルマを代わりに今、その車両に乗せております。片目を入れてダルマに車両に乗って頑張ってもらっている。一両残った奇跡の車両ということになっておりますので、それに「復興だるま」ということでダルマを乗せて4

月になれば線路が繋がって久慈まで戻ってくる予定ですので、残った片目を入れたまた皆でイベントをしましょうということで、今、様々なダルマ、大きいのから小さいのまで、皆さんにご購入いただいて、そこに乗ってもらっています。

ですから、自分達でちょっとずつ楽しみながら次に繋がる活動をとということで、お金の無い団体でもありますので、とりあえず工夫をしながら皆でちょっとずつお金を出し合いながらということで頑張っております。

なかなか、先ほどの先生のお話じゃないけども、大きなことというのは全然できないわけですが、自分達がやれることをまずやれるペースで、あとはどんどんそういうものいろいろな所から仲間を引き込んでいくということが活動に中心になっております。難しいことはよく分からないままここにいるわけなんですけど、そんなところで1つ、よろしく願いいたします。

#### ●松本氏

ありがとうございました。

続いて、武内さんもいろいろな活動をされているようですが、そのさわりをご紹介いただければと思います。

#### ●武内氏

皆さん、こんにちは。よろしく願いいたします。

私、秋田市から来た武内と申します。

秋田生まれで、この6年前に秋田に戻ってきた出戻り組でございます。それまでどこに居たかと言いますと、イギリスの方におりまして、今後、豊かな社会ってどうなっていくんだらうなという都市計画の分野で研究したりですとか、環境のNGOでボランティア活動をしながら、どうやったら地域というものには企業、市民含めて1つのことに目指しているのかと、そういったものを研究、経験してきた者です。

6年前に秋田に戻ってきて、最初に感じたことは、ちょっとこの町、遊び心がないなというふうな、そういったことを最初感じました。

そこで、実は留学に行っていてお金を全て使い果たして帰ってきたわけで、何も財源がない、でもこの町を変えたいなという想いから始めたのが、この「S i NG」という活動でございます。

皆さんのお手元に分かりやすく紙をお渡ししております。カラーの9分割になったものをお渡ししております。

まず、この町、遊び心がないなと思った時に思い出したのが、イギリスで見た「ペロタクシー」というものがあつたんですね。皆さんの資料の右上にあるオレンジ色の物体ですが、これは人力車の自転車版と申しますか、前の方が自転車になっているものなんですけど、それをイギリスで見た時に私は衝撃を受けまして、まずは何だか分からなかったんで

すよね。近づいていったら自転車だったんですよ。2つの衝撃を受けまして、こんなのが街にあってもいいのか！というのと、実は自転車じゃないか！というふうな、そういったやられた感がありまして、これを同じような感覚を私の故郷である秋田市にも、そういったやられた感を増やしたいなど、そういった想いで自転車タクシーを秋田に導入しようと思いました。まずは目標ありきです。

ただ、先ほど言いましたとおり、財源がないと。じゃどうしようかといったところで考えたのが、それじゃ市民貯金を作ろうと。市を良くすること、地域を良くすることだったら、皆さん、賛同してくれるんじゃないかと思ひまして、ただ寄附を募るということではなくて、何か仕掛けを作ってやりたいと思ったのが、隣にある「わらしべ貯金箱」というものです。

簡単に説明しますと、気軽に皆さんが参加しながら市民貯金を増やす方法です。

1つは、「要らないものを寄附してください」と言ういろいろなものを皆さん寄附してくれるんですよね、衣類とか書籍とか食器とか。今度は要る人が「持ち帰ってください」「ただ、値段は付いていないので自分で値段を決めて持ち帰ってください」と。「決めた金額を貯金箱に入れてね」と言うと、どんどんどんどんそのサイクルが回っていくと、2年間、3年間で250万円ほど貯まりまして、その一部を使って、このペロタクシーを秋田で走らせる、そういうことをやっております。

元々、団体としても財源とか無いといひますか、あまり財源に頼りたくないという活動方針もありまして、助成金は一切貰わないという方針でもやっておりますが、それは助成金というのは良い使い方、悪い使い方がありますので、どんどん良い使い方を今後すべきかなというふうにご考えているところではあります。

こういった活動をしながら、一人でやるものではなく、もっともっとネットワークを作ることということをもットーにしております。基本方針としては、誰でも気軽に参加できる。そんな中で活動しながら分かってきたのが、やはり先ほどの遊び心ですね。先ほどの神野先生のお話でいきますと、街の中に遊び心が存在しない。感じられない時でも人々の心の中に遊び心があるんじゃないかと、信じ続けてきた活動でございます。いろいろな遊び心を含めた活動がここには載っていますが、それをやってきて、今、4年ぐらひになりますかね。段々いろいろな方々が関わり始めて街が動き出しているといった状態でございます。

●松本氏

ありがとうございました。

ちょっと教えて欲しいんですが、「S i N G」というのはどういう意味ですか。

●武内氏

これは、サステイナビリティという持続可能という言葉は最近使われていますが、サス



ティナビリティ・フォー・ザ・ネクストジェネレーションズということで、次世代に繋がる豊かな社会を作っていこうというふうな団体の名前でございます。

●松本氏

なるほど。

遊び心があって、お金も、知恵を出せば集まるといことですね。

4人の方にそれぞれ自己紹介していただきましたけれども、これは分権のシンポジウムですから、次は分権との関わりでお話いただきたいのですが。

権限や財源を国から地方に移譲するといった分権改革は、ここ十数年続いているわけですが、そういう中で、役所の人とか、有識者とか、我々一部のジャーナリストもそうですが、原発の事故の後、批判された原子力村と同じように、分権村になっているんですね。分権村の内部だけの話がかなり多くて、もうちょっと原点に立ち返って考えた方がいいのではないかと思っていたところに、丁度、神野先生が「生命とか、共生とか、参加とか、そういうことを大事にしていくのが分権だ」というお話をされたので、ちょっと意を強くしました。これで少しやりやすくなかったかなという気がします。

ご自分達が活動している中で感じていることですね。それぞれの地域で住民の方とか市民グループの方が自由にいろいろな活動ができれば、それで十分といえば十分なのですが、そこに法律で決まっているからとか、何かいろいろ規制があるわけですね。それが邪魔になって、なかなか自分達の力を発揮するのが難しいな、ちょっとやり難い所があるなという点を出していただければと思います。

順番、湯浅さん、1番こちら側に座ったのを運命と思って、最初にちょっと、自分の活動を踏まえながら、そのへんのところをお話いただけますでしょうか。

●湯浅氏

そうですね、私、さっきスローフードというの市民活動を簡単に言葉だけ伝えたんですが、結局、地方分権というの、道州制の関係の委員をやっているんで、それと同時に両方の立場から考えるんですね。スローフードというのは、食を通してなんですけど、自分の暮らし方、家族とか地域での自分達の生き方みたいなものを考える、そういう運動でもあるんですね。それをやっていると、そこに目的を持った、志を持った人達が集まり、多種多様な人達がとても楽しく、そして意義を持って集まってくるんです。自分達のやりたいこと、子ども達へのことだとか、いろんな状況が変わっていく中で、暮らしのことも、エネルギーもそうだし、環境のことも勉強しようと思うと、あつという間に話がまとまって、すぐに動けるんですよ。お金をどうしようとかって考える前に、まず自分達が何をやりたいか、どうしたら良くなるのかと考えたことを言葉に出した途端にその多様な人材があつという間に知恵と力を発揮し出すという。ということはこの10年やっています。

自分がその地域に立ち戻り、この地域の中で何故その感覚が自分の中になんだらうと

思った時に、自分の暮らしと地域での暮らしがあまりにも離れているんだなと思ったんですね。離れているって言ったら変ですけど、要するに町の暮らしは行政がやってくれることであり、国の法律でやってくれることであり、何か私達が口を出してはいけないもの、みたいな離れた存在になっていたなって、ちょっとここのところ気がつき出して、そうかって。

実は、スローフードの運動の仲間にも、行政、主婦もあり、行政マンもいる、企業の社長さんもいる、多様な人達が集まっていると、物事って凄く考えやすいし決めやすい。でも、これを地域に戻したら、実は地域にも志あるというか、行政マンもいて、その地域の企業もあり、私達一般のような市民がいて、じゃ一緒にやればいいんじゃないかと、逆に思い出したんです。

そう思った時に、私達って、自分の地域の暮らしって、あまりにも他人任せだったんだなっていうのを最近感じます。他人任せというのは、要するに関心を持たないということです。それを凄く自分でも反省しました。自分達では要求するのに、じゃ、自分達でその部分はやれるのにやろうとしなかったなっていうことに気がつき出すと、そうすると、今度、凄く平たい言葉で言うと、自分達のやりたいことを言葉に出す、伝えるようになったんですね。そうすると、ことが動き出すのが早くなったんです。要するに見え方も、そして地域との関わり方も。これをどんどん増やしていこうって、最近は思うようになりました。

実際、その法律にぶつかってしまったりとかというのは、知恵者が多くて、上手くくぐり抜ける方法もその時に伝授されちゃうものですからあれなんですね。お金がない、でもお金はやりたいこと、本当に志を持って皆にやりたいと伝えれば、正直、集まるんです。不思議なんですけど。余分には集まらないけど、必要な分だけは集まります。

これを、実は120人の仲間がいるんですけど、じゃ自分達の町に活かそうと思って、各地域に戻り、地域のリーダーになっています。凄くなって思いました。地域のリーダーになっていて、行政マンだとか、いろんな人と関わるようになりました。

ただ、ここにきて今まで自分達のやっている活動を一步広げようと思った時に、やっぱりそこには規制というか、地方自治と言われるものが出てきているな、というふうには感じます。

最近、そういうことを感じるようになりました。まず、私達は、当事者意識になることなんだなって。自分達が自立していなければ、その町も自立しえないということも分かりました。このネットワークというものを私は自分の町にも活かしたい。自分達の町で自立の方向を目指す人達と手を結ぶ。そして、それができない地域もある。北海道も御多聞に漏れず過疎化が進んでいますので、自分達の町だけではできなければ、隣の町、その隣の町にネットワークを広げていく。そこで初めてそういう皆でできること、何ができないか、何ができるかを整理するところから、今、始めています。

というところですね。

●松本氏

そうすると、制度や法律が問題というよりも、むしろ自分達が自立して何かやるというところが足りなかった。むしろ、主体の方に問題があったという、そんなところでしょうかね。

●湯浅氏

そうです。ある意味、私達の仕事は議員さんを選ぶことみたいに思っているところがあったり、役場の人に何か言われたら「これやってください」って伝えるのが役目だったりというような、何か変にそういう縦割りのようなものを自分達の意識の中に作ってしまったような、今、反省を持っています。それは逆にスローフードのネットワークから教わりました。

●松本氏

では次に、久保さんをお願いしますが、震災に遭われたわけですよね。その過程では、いろいろ問題を抱えながら、復興に努力されてきていると思いますが、その時にどういうことを感じられましたか。今の制度だと、何か上手くいかないところがあるとか、国が融通利かないとか、感じられた点がありましたら、率直にお話いただければと思います。

●久保氏

震災の後にいろいろ対応しまして分かったことは、非常に県とか国との連携が上手くいって、災害時に大変作業が早く進んだという部分と、これから大きな復興に向けて取り組んでいかなければならないんですが、その時にもう少し使い勝手の良い補助とか、そういう仕組みがあればいいなというふうなことは感じましたので、ここで被災地の代表ということで、少しこれまでのことをお話をさせていただきます。

先ほど、久慈の田中さんがおっしゃったように、階上町も物凄い甚大な被害だったんですけども、いつの間にか「被害があったんだ」なんて言われることもありまして、非常にその当時は思い出すと、喪失感、絶望感、それから実際に被害に遭った方々の苦しみを思い出すと、やっぱり風化させてはいけないなと思いながら、今、いるんですけど。

5.5キロの海岸に5つの漁港があるんですが、その4つの漁港が全部駄目になりましたし、それに伴う関連施設、集落が一瞬のうちに呑み込まれました。10.7mということになっていきますが、実際は言葉には言い表せないような物凄い壁のような津波だったというふうに聞いております。

そこで公共施設とか、それから漁船、漁具、そういうふうな多くのものに大体13億という被害が出ました。それに対して、一つひとつ対応していかなければならなかったんです

けど、早速、全国の皆さんからお見舞いとか義援金とか寄せていただきまして、本当にあり難いなと思いました。この場を借りて、皆様にもお礼申し上げます。お陰様で、早速被害を受けた方々に配分いたしまして、復旧の方も大分進んで平穏な暮らしに戻りつつあります。

このように早く作業が進んだということは、実は三村県知事さんとか、国の方、県の方、議員さん達が現場を見てくださって、このようにおっしゃいました。町長に向かって「お金、予算、それは何とかするから、手続きも後でいいから、やっていいよ」というゴーサインをくださったんです。町長の頼み方がとても切実な感じを受けましたので、良かったなど、それを受けて職員も早速動くことができました。

皆様もよくお聞きになると思うんですが、役所仕事は時間が掛かる、遅いと言われますが、そういうことでやれる分はとにかくやろうということで、役場の職員も頑張りましたし、地域の皆さんも早速動きました。

地域の皆さんの底力を感じたというのは、今日のトークセッションのテーマにもありますけども、自主的にすぐ消防団とか地域の防災組織の方、それからいろんな方々が避難誘導に動いたり、安否確認をしましたり、日赤奉仕団とか、民生委員、婦人会の皆さんは、すぐに避難所に炊き出しに掛け付けました。それから、地域の皆さんはすぐ明るくなると、自分達の周りの瓦礫の処理に取り掛かりましたし、漁協の皆さんも漁師の皆さん達ができる所も、港の中はできませんけども、できうる限りの港と漁船の後片付けに取り掛かりました。これは、凄いなと思いました。待ってられない。自分達でやるしかない。やろうという、そういう意気込みが感じられました。待ってられないという、その地域の人達の立ち上がる力、そこに底力を感じました。

また、実際にご自分が被害に遭った方が消防団のリーダーになっている方なんですが、その方は、ご自分の方も気になるんですけども、他の方に駆け付ける姿にとってもあり難いなと思いましたし、その使命感、凄いなど。例を挙げればそういうことですけど、多くの方がそのように頑張ってくくださったのが印象に残っております。

それから、実は、災害廃棄物の処理が7月2日に全て完了いたしました。これは、職員が、勿論すぐ動いたのもあるんですが、建設土木関係の皆さんの協力とか、それから早くに処理場に運べるような状態にしたというところも連携プレーというか、やれることはやろうという、そこに集約できるのではないかと、未だに持っていても処理できない状態というのがありましたので、県内の被災地では1番早くごみの、災害ごみの処理ができたのは大変良かったなと思います。

あと、商工関係者の協力で食料とか交通機関にも大きな混乱はなくて、大変あり難かったなと思います。自分達でできることは、自分達でやろうということが、この復旧が早かったんじゃないかと思っております。

そういう意味で、「後でいいから、手続きは後でいいからやりなさい」というあり難いゴーサイン、これができれば災害時だけではなくて、これから分権が進んで権限の移譲とか

あると思うんですが、財源も含めて、そういう確保も含めてですが、できればスピード感を持って対処できて、しかも地域が1番、今やらなくてはいけないというところに取り掛かれるような、そういう仕組みができたならいいんじゃないかなと、その時に感じておりました。

それから、大分復旧も進んだところで、7月の末にこれまで応援していただいた方々に立ち上がった姿を見ていただこうとか、感謝の気持ちを表そう、それから実際に被害を受けた商店の皆さん達は仕事をしているんだろうかというふうに心配されていたというので、復興イベントを行いました。被災を受けた人達が力強く立ち上がっておりましたし、ここでとても感動しましたのは、三戸郡には6町村あるんですが、5つ、全ての町村から応援の出店が出てくださいますして、また、一層賑わいを見せてくれました。地域の絆、それから町村の絆、そういうところも感じられて、災害がもたらしたんですけども、そのの大事なところに気付かされたなという想いがいたしました。

まだよろしいですか。

●松本氏

はい、短めにお願いします。

●久保氏

実は、人的被害が無かったのは、「津波が来たら線路の上まで逃げろ」というのが合言葉になっておりました。ちょっと高い所にJR八戸線がありますので、お陰で、その言葉のお陰で誰も被害に遭わなかったということで、この防災意識の高さ、これが功を奏したなということで、今、全部の行政区に自主防災組織が整備されましたので、今後はそちらの方の充実もやっていこうかなと。地域の底力を見て、今後の町づくりにきっと期待できるなというふうに思いました。

津波の教訓を残すということで、「津波の碑」というのも作って、「忘れるな あなたを守る 地域の絆」という町長の言葉と、裏の方には地域の皆さんが津波襲来の模様を克明に記したものを作って教訓としております。

先ほど、簡単に触れましたけども、良い部分とそれからこれからやっていく時に、被害が少ないから復興交付金の対象には難しいとか、別な方の補助金を使おうと思えば、復興交付金の方だと、そういう今、板ばさみもございますので、そのへん、もう少し融通を利かせるとか、やっていただければと、間違っているかもしれませんが、それを今、感じております。

お時間、長くなってすいません。

●松本氏

なるほど。

災害の前から地域のコミュニティの力といいますか、絆が強かったということですね。

●久保氏

そうですね。海拔何mって、ここは危険区域だよという表示も地域ごとに立てて防災訓練をやっております。

●松本氏

田中さん、先ほどちょっとお話されましたけれども、ダム湖に船を浮かべるのも大変だったとか、いろいろ活動していくにあたっては障害もあったようなお話だったと思うのですが。そのへんをお話いただけますでしょうか。

●田中氏

行政関係の方を目の前にして話すのは、大変気がひけるところはあるんですが。

大変面白い例だったなと思うんです。社会化実験というものを1年やらせていただきまして、当然、公共の場所ですので、そこで営利を伴うことはまかりならん、というのが大前提なわけですが、当然、ダム湖に船を浮かべて、勿論、人件費も掛かりますし燃料費も掛かりますし、いろんな、勿論、船の減価償却とか全然考えなかったんですけども、それもいろんなお金が掛かるので、必要最低限は皆さんに少しは応援していただくということで料金なんかも決めさせていただきました。

ところが2年経って、実際に本当に運航を開始させてくださいと言うと、県のそういう公共のもので営利事業をするのはいかななものか？というふうな反対意見とか、いろんな問題が出てきたのも事実です。

最終的には、地元の市と民間の事業者、勿論、船を持っている方、民間の事業者の方だったので、民間の事業者の方が共同してそういうことに対応するというので、最終的にお許しを頂戴したということです。本当に何回県庁にお邪魔をしたか考えると1か月の間に3回も4回も行ってきたような気がしております。

そのほかにもいろんなことをやるんですが、私共は、久慈市と岩手県の指定管理みたいな仕事もさせていただいて、久慈市さんの方から勤労青少年ホームという施設をお預かりしているんですが、やっぱり市の施設なものですから、お金を取ってはいけませんということで、それで皆さんに無料で貸し出しするのはいいんですが、例えば、障害を持った方達がバザーをやりたいので、バザーで売るものを作りたいから場所を貸して欲しいというふうな話があるんです。バザーといえども、そういう営利目的のために使ってはいけませんというふうな条例がありますので、そういう、普段、そこで活動している方達が年に1回、バザーのために準備をしたいんですけども、という話を頂戴すると、申し訳ないけども、それですとお貸しできません、というふうに言わざるを得なかったり。

小さいことですけども、いろんな方が集まって来られるので、例えば、自動販売機を置

きたいと思ってお願いしても、そんな市の施設に自動販売機を置いて営利活動をするのはまかりならんということで、それをクリアするのも1年半ほど交渉が必要でした。

あと、自分達、つまらないことに首を突っ込むのが好きなので、今、流れて壊れてしまったんですが、「もぐらんぴあ」という小さな水族館があります。そこでいつも4時には閉まってしまいますので、夕方から使い道がないので、1回、水槽、魚を見ながら宴会をさせて欲しいということをお願いして、市の方の観光課の方に行って、最初は盛り上げていたんですが、最後にオッケーをもらう段階になって、目的外使用はまかりならんというふうなお達しを頂戴して、これも宴会するまで1年半ほど交渉させていただきました。

先ほど、湯浅さんなんかもお話になったんですが、やりたいことを口にする、知恵を貸してくれる方が出てきたりとか、こういうふうな前例があるよというのを紹介していただいたり、そういうことがまああるものですから、私自身も分権というか、あまり難しい話には取り組んだことがないんですが、でも、自分達でやりたいことを自分達の口に出して、自分達はこんなことがしたいんだというのを全面に出すと、何となく周りが応援してくれるふうな感じになってくるのかなというのは、やっぱり肌で感じております。

●松本氏

なるほど。

やませデザイン会議には、行政の関係者はいないのですか。役場の職員とか。

●田中氏

役場の職員さんは、会員の中には今現在はおりません。ただ、いろんな形で一緒にやらせていただくことはあります。

●松本氏

そもそも、やませデザイン会議は、どういう人達で作っているNPOでしょうか。

●田中氏

元々、母体、最初のきっかけは、J Cのシニアの方達が作り始めたのが、やませの母体になっています。

当時、市町村の枠を超えて活動すると、それぞれいろんなしがらみがあってなかなか上手くできないというか、そういうことがあったので、その当時は、J Cはすぐに久慈広域圏、普代村から種市町まで全部が入った状態になっていましたので、そういう人達が大きな括りの中で自分達で持ち回りで活動していきませんか？というふうなことが最初のきっかけになっております。

●松本氏

では、武内さん。

助成金ももらわないし、行政とは何の関わりもないから分権と関係なくやれるということでしょうか。

●武内氏

まったくもってそうではなくて、やはりネットワークというか、そういうものが大事だとは感じております。

社会の主役というか、社会のプレーヤーと考えた時に、やっぱり市民、企業、行政という3者、プレーヤーがいる中で、私の考え方としては、今、行政の方が沢山いらっしゃいますが、行政がトップで市民、企業というふうな形が、もしかしたら今までのやってもらっていた感のある社会だったかと思いますが。今後は、その逆三角形になって、もっともっと市民、企業が主役になる、市民主役型社会というふうな意識を持つことが、多分、役割的はちょっと違うんですが、そういうふうな意識を持つことから関係づくりをしていくのが必要かと。それが助成金とか、そういったところにも関係してくるんですが。そういった感覚でやっております。

例えば、私がやっている活動と一緒にボランティアをやっている方に行政の方もいらっしゃいますし、活動の時には告知とかが必要になる時には、告知は行政の人のパワーというのは、非常に感じる場所があります。お金は要りませんが告知はしてくださいということで、ポスターを部署に持って行って配ってもらったりですとか、そういう関わりをしながらいろいろな、目的は一緒なんですよね。地域を盛り上げていきましょうですとか、地域参加を促しましょうという意味では、共通したゴールを持っているので、お互いの得意な分野でネットワークを組んでいくというのが、今、そういった形を組んでいますね。

●松本氏

そうすると、特にこのへんの法律や条令とか、これが面倒だなということは、別にないですか。

●武内氏

そうですね。ただ、考えているのは、いろんな地域活動をやる団体と接する機会がありますが、それぞれの団体はやはり勢いがあったりですとか、そういった意味で活動をやっていると、そういうふうなサイクルはあるんですが、ある程度やっていくと疲れてきます。そんな中で、何に疲れてくるのかというと、地域づくりとか町づくりとか、自分達の活動がプラスアルファの活動になっている時に疲れるんですよね。自分達がこの地域づくりに本質的に関わっていて、それが形になっていく。そういった活動になかなか作った感がないというか、やった感がない、実感が湧いていない所があると思います。そこは、何です



かね、多分、それはもう地域分権なのかってありますけども、もう町づくりとか、そこに最初の計画段階からどんどん一緒になって取り組むというふうな、例えば、イギリスの方では、地域のマスタープランというのは、企業、住民、NPOですとか、あとは行政の方、建築会社とか、皆がどういうふうな目標、どういうふうな理想を描くというのを決めてから、段々段々その作業をしていく。そうすると後戻りがない。例外というか、実はこういう規制があつてね、という、そういうのがないとか、そういうふうなものがあります。そういう形もいいのかと思います。

あとは、どんどんどんどんやっていく時に感じるのは、特区のようなものをどんどん作って、自分達の特性、地域の資源っていろいろあると思うんですけど。その地域資源を活かせるようなものをどんどん作っていくのが、前例のないものをどんどん作っていく。そこにNPOですとか、そういう活動も関わっていくというのが1つ大事なのかなと思います。

ですから、自分達がやった感というものがあれば、もっともっと元気なNPOが増えていくんじゃないかと思っております。

#### ●松本氏

分権というとすぐ権限、財源の移譲といった話になるのですが、4人のお話を伺っていると、まずは、住民や市民グループの方が、自分達で自立した活動を作ることだ。それが出発点だということところが共通点かなという感じがしました。久保さんは、今は行政の立場ですけれども、そもそも震災後の対応で地域の絆が非常に力を発揮したというお話でした。分権の基本的なところに立ち返ると、どういうふうに権限とか財源を配分したらいいのかを考える時に、補完性の原理というヨーロッパから出た考え方ですが、それが中心になっています。自分達でやれる活動は、自分達でやればいい。自分達でやれない所があつて、初めて政府というものを作る。身近な政府を作つて、身近な政府では間に合わない場合、もうちょっと広域の政府を作る。それでも間に合わない場合に、一国の政府ができていくという考え方です。そういう補完性の原理の1番基本的なことを今日、伺ったような気がいたします。

残りの時間が少ないのですが、会場の方でこの4人の方に対するご質問がありますでしょうか。あれば2、3人でも受け付けたいと思いますが。

マイクが行きますから、どなたへの質問かおっしゃっていただいて、お願いします。

#### ●質問者・女性

大変皆さん方の貴重なお話、ありがとうございます。

この経歴の中で湯浅さんにお伺いしたいんですが。

北海道道州制特別区域提案検討委員会の委員というお役目を持っていらっしゃいます。

非常に興味がある委員というので、どういうお仕事をなさっているのかお聞きしたいと思いました。

●湯浅氏

そうですね、道州制という仕組みは、ここ数年言われていて、全国で、北海道だけではなくて、幾つかのブロックに分かれて自立を目指す、ちょっと大きな単位の自立を目指す、国づくりに対して、どういうことを要望するかということ、今言った、きゅうくつな制度や法律を、どこで地方は感じて、それをどこで権限移譲すればもっと自らの方向性に行くのかということだと思っんです。そこを議員さんとか、そういう委員をやっている方ではなくて、一般市民の声から聞いていこうという、委員会というのがほかにもあるらしいんですね、私も全てを知っているわけではなくて。私がやっている特区の提案委員会というのは、各、北海道中の市町村の市民から挙げられた不便を感じていることとか、引っ掛かること、「ここ権限移譲して欲しい」という提案が上がってきた時に、それを国に上げていい意見なのかどうかというものを考える委員会なんです。

だから、一般市民からちゃんと上がってこないと、話し合いもできないという。だから、私は最初からの委員ではないんですが、もう何年かやっていて、年々分権に対しての提案が減ってきていると。それは半分諦め、さっきも言ったんですが、関わっていることが自分の手には負えないから、最初から諦めている場合と、これは法律で駄目と言われてしまったら答えが出ちゃったので、もうこれ以上何も言えなくなってしまうというのと、両方あるんです。

ただ、やっぱり長くやっていると、最初の頃、これは駄目なんじゃないかと言われたものが、実はこの時代の流れの中でもう一度きちんと提案し直して、そしてそのいろんな方達と一緒に知恵を絞って、提案の仕組みを変えたら、北海道として自立の道が描けるんじゃないかという提案も出てきたとか。そういうのを会議のたびに日々話し合っています。

だから、さっきの分権じゃないけれど、結局自立していく道を探っているというのが、今、日本中で起こっていることだと思っんです。その言葉を拾い上げるという意味です。

●松本氏

ほかにありますでしょうか。

●質問者・男性

すいません、よろしくお願いします。

スローフードの湯浅様と社会活動団体「S i N G」代表の武内さんにご質問があります。

まず湯浅さんにですが、スローフードという団体は、青森にもあるというふうに聞いているんですが、今回のシンポジウムの中では、スローフードの活動についてのご説明がありませんでしたので、誰でも入れるものなのかとか、どういうふうな理念を持っているの

かとか、入会することによってどのようなメリットが得られるのかということについてご説明くださればと思います。

あと、武内さんについてですが、助成金に頼らないで、このような社会活動をしていて凄いなと思ったんですが。やはり、収入が無いと持続可能性というのは保たれないと思うのですが、例えば、自分のことだけで精一杯の人がなかなか強制的に税金の徴収とかじゃなくて寄附をするというふうなことは想像し難いんですが、収益を得る時に何かご苦労なさった点があるかどうかについてお聞かせくださいますでしょうか。

#### ●湯浅氏

時間がないので私から答えますね。

ちょっと今日は時間がなかったので、スローフードのことを深くはお話できなかったんですが。もしかして、ここに絡められるとしたら、スローフードは食を通して人と人を繋ぐネットワークだと思います。スローフードの哲学というのを話し始めると、話したいことは一杯あるんですが。私は農家のお母さんであり、副知事をやっていた方がメンバーにもいるし、料理人や多彩な顔ぶれです。要するに食を通して自分達の暮らしや生き方をもう一度見つめ直そうという呼び掛けの運動なので、誰でも入れるんですよ。

それとあと、日本全国に 50 近い支部というのがあって、その関わっている人達によって特色が全部違います。そういうことを紹介するのでしたら、今度ゆっくりホームページを見ていただければ、いろんな紹介が載っていますので、終わったらもうちょっと詳しくお話できますけども。

ただ、今回のテーマと繋がっているのは、震災とも深く関わっていて、実は2月に私達は八戸で総会をやりまして、久慈を通して田野畑村を通り、気仙沼も行ったことがあります。そういう人と人との繋がりは、実は北海道だけとか、地域だけの繋がりではなくて、これからの日本の防災意識の中で何か顔の見える関係の繋がり、ネットワークを持っていると、そこまで全部、補完し合えるというか、防災意識、リスクマネジメントもできるという。そういう繋がりを深めていくネットワークは、スローフードの活動や、いろんな取り組みの中に生まれてくるんじゃないかと思っています。

すいません、簡単に。

#### ●松本氏

では、武内さん、お願いします。

#### ●武内氏

参加者があまり負担がなくという意味でやっているところはありますが、例えば、わらしべ貯金箱に集まってきたもの、自分で値段を決めると先ほど申し上げましたが、100円以上なら幾らでもいいという形にしています。ですから、どんな人でも、これ一品 100円な

らということで参加できますし、気持ちのある方は同じものでも1万円を入れていく方もいらっしゃる。そういった形で自由度を持たせていることで、そこで何をやるかという、100円の対価ではなくて、参加することで非常に満足感を得られる方が多いんですよね。この今のフリーマーケットのようなものだけではなくて、例えば、商店街ですごくをやりますと。参加費も低額にして、子どもでも参加できるようにしましょうと。結果的に何が生まれるかという、商店街と市民との交流が生まれたりします。我々のスタッフの方で「お金が貰えないのに何をやっているか」というふうなことの質問だとしたら、それに対して非常な喜びを感じる方が集まってきますね。そこでコミュニティが生まれて、そこで会話をしている、そこで時間を過ごすことに非常に満足を得ている方が集まってきます。勿論、仕事を抱えている方は仕事の合間に参加する場合がありますし、いろいろな状況で、それも自由度も大いに許しております、1時間だけの参加ですとか1週間ずっと参加するとか、ちょっとだけ顔出しに来た、そういうのもいいような、つまり、お金という価値観ではなくて、コミュニティですとか交流、先ほどの触れるという、交流というのがありました、そちらの方に段々感じてくれる人が増える、そこに何か喜びを感じてきている人が増えるんだと、そういうことを活動を通して感じております。

また、先ほど助成金の話がありましたが、助成金はいい使い方、悪い使い方があると私は実感しておりますので、今後、良い使い方をしていきたいと思っておりますので、そういった意味で、より社会に効果的なことをやっていきたいと思っております。

回答になったかあれですけども。

#### ●松本氏

時間がきてしまいましたので、これ以上の質問はお受けできません。

質問がなかった久保さんと田中さん、今日はお互いの討論は別になかったわけですが、今日参加されて他の方の発言も聞いて、これだけは言っておきたいということがありましたら、1分程度でお願いします。

久保さんからお願いします。

#### ●久保氏

分権という、そういう資料を見ますと、地域の人が考え、地域の責任でコミュニティなり、今1番気付かなきゃならないことに取り組める、そういうふうなことが書いてあるんですが、私の町でもコミュニティ、そこをこれから力を入れていきたいなと思っておりますので、湯浅さんのお話とか、秋田の方のお話とか、こちらの久慈の方のお話とか、そういういろんな活動を今日具体的に伺いましたので、それを是非、町民の方にちょっと伝えながら、うちの町でできるものは何かな？というところに参考にさせていただきたいと思っておりました。ありがとうございます。

●松本氏

田中さん、お願いします。

●田中氏

本当に難しいこと、よく分からないんですが、NPOの立場からお話をさせていただくと、行政とNPOの1番の違いは何だろうなと思って、NPOというのは失敗ができるんですね。行政の方というのは、失敗という言葉が凄く使いづらいと思うんですが。失敗をしても、何で失敗したか分析をしてまたやり直すチャンスがNPOにはあります。ですから、そういう意味で、まずやってみるということが凄く大事ですし、やってそれを継続するということが非常に地域の力を高めていくし、それがひいてはやっぱり分権というか、地域の自立ということに繋がっていくのではないかと考えております。

ですから、企画段階からまずいろんな方とお話をしたり、いろんなご助言を頂戴したり、でもやってみるのはまずやってみよう。やってから考えようというのが、私達のスタンスになっております。

●松本氏

どうもありがとうございました。

湯浅さんと武内さん、いいですか。遠くから来られて、これだけは言っておかなくちゃ帰れないというようなことがありましたら、一言で。

●湯浅氏

ありがとうございます。

私もスローフードやいろんな農村の中で暮らしていて、いろんな所にネットワークができると、その町、その町に個性が違うということを知ります。人間に個性があるように、その町の個性があって、その町が本当に生き延びるために優先順位ってそれぞれ違うんですね。その優先順位がこういう法律や制度の中に凄く入りづらいというのを、実際やっていて感じます。ありがとうございました。

●松本氏

武内さんも一言。

●武内氏

最後に一言だけ。

地域分権という話がありますが、私は湯浅さんの先ほどの発言に全く賛同で、当事者意

識、いわゆる主役意識、どんどんどんそれがなければ地域分権がいかに素晴らしくなくても、限定的な効果しか生まないんじゃないかなというのが私の実感です。

そのためにも両輪だと思います。やはりそれを支える地域分権の仕組みと、それを受け止めて活動する地域の主体性というもの、そういったものが大事かと思っています。

その主体性が誰でも参加できるように、そういったものを今後とも活動を通じて続けていきたいと思っています。

どうもありがとうございました、本日は。

●松本氏

どうもありがとうございました。

時間もありませんし、まとめる力もありませんので、まとめもなしにします。

聞いていて、4人のお話で地域には底力があるなと感じていただければいいかなと思いますし、これなら大丈夫だぞという印象を強く持ちましたね。心強いトークセッションだったと思います。

では、遠くから来られました4人のパネラーの皆さんに拍手をお願いします。

●司会者

コーディネーターの松本様、及びパネリストの皆様、お疲れ様でございました。ありがとうございました。

ここでご出演の皆様はご退席なさいます。どうぞ皆様、今一度大きな拍手をお願いいたします。

ご出演の皆様、ありがとうございました。

皆様、ありがとうございました。

これで本日のプログラムは全て終了いたしました。

皆様、長時間にわたりお付き合いいただきまして、本当にありがとうございました。どうぞ、アンケートの方、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。アンケート用紙は、お帰りの際に出口に設置しております回収ボックスにご投函くださいますようお願いいたします。

それでは、コートなどお忘れ物がございませんように、身の回り品をご確認の上、お気を付けてお帰りくださいませ。

本日はありがとうございました。